

上田紀行 東海学園大学特命副学長 インタビュー 後編

東海学園大学（名古屋市天白区）の上田紀行特命副学長はリベラルアーツ教育を東京科学大学（旧東京工業大学）で先駆的に実践した。東工大副学長を務めた上田氏はメディアで現代社会の「生きづらさ」への提言を続ける学者としても知られる。若者から悩める大人まで豊かな人生とは何かを説く「生きる意味」（岩波新書）「かけがえのない人間」（講談社現代新書）などの著者にして碩学の文化人類学者の話に引き続き耳を傾けた。（聞き手は塚本隆編集長）



自分を広げ、深めて、人生の大きな「志」に出会ってほしい

—スリランカでの研究。宗教と癒しについて教えてください。

上田特命副学長 スリランカのフィールドワークをしたのは、私が27から29歳ぐらいの時、随分昔です。当時の日本には、「癒す」という動詞はありましたが、「癒し」という名詞はありませんでした。そこで私が言い出したので、私は業界では「癒しの上田さん」とずっと呼ばれ、「癒し」という言葉を作った人と、よく言われましたが、その原点はスリランカの悪魔払いですね。スリランカに行って、村祭りで、元気じゃない人が元気になることがあるらしいと聞いて見てみたいと思いました。スリランカは多民族国家で、シンハラ人が8割ぐらいの人口を占め、多数派は仏教徒。悪魔払いが行われるのは田舎です。

—悪魔払いとは。

上田副学長 無知蒙昧な人たちが悪魔払いをしているわけではありません。病院、医療は完備しているのに治らない病、例えば、お父さんが生きる元気がなくなり家で酒ばかり飲んでいるとか、子供が不登校になって閉じこもっているとか、お母さんが何かのストレスで悪夢ばかり見ているとかですね。星占いはスリランカではとても流行っていて、公共の建物の竣工時間も星占い師に相談するくらいなんです。星占い師に聞くと、その時間、あなたは悪魔に襲われやすいなどと言われたりするわけです。

悪魔払い、それは緊迫した、しかし楽しい徹夜

の村祭りで、患者さんを治していきます。悪魔払い師は4人のダンサーと2人のドラマーで行いますが、最初はダンサーたちの踊りから始まり、深夜になってドラマーが激しくたたき出すと、患者さんの中にはトランス状態で踊り出す人もいます。捕まえて、「お前は誰だ」「○○悪魔だ」「何月何日に来た」「仏さまの命令に従って去るか？」「去る」とか、憑依した悪魔と緊迫した会話になります。その後はひたすらお祓いのような儀式が続く、そのクライマックスでは呪術師が自ら患者の悪魔を吸い取る段になります。

その後朝方になると仮面を被った悪魔が次々と出てきてダジャレ、下ネタなどギャグのオンパレード。2時間ぐらいは村人みんなが笑いの渦になります。

—それで完治ですか。

上田副学長 8割方良くなっていますね。それでどういう人に悪魔がつくのかというと孤独な人。孤独な人に「悪魔の眼差し、が来るという風」に言います。私たちも「俺って見捨てられたんだ」と思うことがありますよね。親の一言や、友達、上司の言葉であれ、ひどいこと言われたりして、「俺、こんなに頑張っているのに、なんでこんなひどいことを言われなきゃいけないんだ」とか人生のいろいろな場面で、「なんで誰も助けてくれないんだ」となります。そんな「神も仏もあるものか」、みたいな究極の孤独に陥った時に、悪魔が来るわけです。でも悪魔払いの村祭り